

○吉見 静子
(岐阜女大)

目的；本研究は住生活の変遷の史的研究の一環であり、今回は家の諸事を書き留めた「富江家文書（諸控え）」（1918～1970）が残されている彦根市の富江家（明治初期建設）を通して、住まいの変化と家族の歴史・住まいへの要求との関連を明らかにしようとするものである。

方法；「富江家文書（諸控え）」を整理すると家族の歴史や住まいの改造などの年代がわかる。そこで、「富江家文書（諸控え）」を家族の歴史と住まいの改造を軸にして年表化し、実測調査・痕跡調査・聞き取り調査の資料を合わせて総合的に考察することによって、住生活が大きく変わる時点の復元図を作成し、改造の時期と家族の歴史との関連を考察し、さらに住要求について考察を行なった。

結果；改造は家族の誕生、結婚、死亡などの前後に行なわれ、特に第二次大戦後の改造が多くみられる。（ざしき）に床の間を設置し格式の高い座敷とすることから始まり、徐々に開口部を拡大・板戸を障子戸にし採光面積を拡大、縁を設ける・ゆかをにわに張りだし床面積の拡大を図る、天井を張る・障子戸をガラス戸に変える・建具のないところに建具をたてるなどして密閉性を図り、さらに浴室や便所の改装などが行なわれる。これらの改造は表の空間から裏の空間へと進み、家族の変動がある度毎に段階的に行なわれている。

湖東の農村部の民家においては、昭和20年代の中頃までは伝統的な住宅であったが、その後、機会あるごとに、開放的に開口部を多くする、ざしきを格式の高い室とする、床面積の拡大、各室の個別化、便利な設備装置を取り入れているなどを試み、快適性を求めて改造を繰り返しているが、基本的な平面構成は継承し、伝統的な家の行事を可能にしているといえる。